

僕たちが慶應を薦める理由

ライター：敷田彩乃、加藤祐暉

エディター：佐藤山葉

慶應義塾大学綱島寮は 2012 年に建てられた。広々とした食堂の白いテーブルやカラフルな椅子は清潔に保たれている。壁にかかる寮の集合写真はここが多くの学生にとって「家」であった事を物語る。

仲出川卓郎さんは慶應義塾大学院理工学研究科に所属しており、2014 年の夏から綱島学生寮に RA (Resident Assistant) として住み始めた。寮の規模によってその人数は異なり、綱島寮には現在 4 人の RA が在籍している。RA の仕事は、日本の大学生活になじむのに苦労している留学生をサポートすることである。異なる言語や文化を理解することは、語学を勉強している学生には困難なことである。例えば、寮の学生がお互いを知りあえるように、仲出川さんはお花見パーティーを企画した。

キム・ヒョンソクさんは韓国からきた寮生の一人だ。彼が韓国での生活に飽き、日本での刺激的な大学生活を求めてやってきた。しかしながら、大学生活になじむには苦労し、そこで RA に助言を求めた。また、彼は日本での就職を考えているため、サークル活動に加えて就職活動についても質問した。

RA は手とり足とり助けているわけではない。「RA は留学生が自立できるように適度な助言を与えるのが上手い」。アメリカ、ノースカロライナ出身の交換留学生ジュリアナさんはそう述べる。彼女は以前に銀行の手続きで困っていたが、RA の助言や情報提供をもとに最終的には自力で解決できたという。RA とは、ただ留学生を手伝うのではなく情報や助言を与え、時には共に行動し直接的に教えることで、留学生が自主的な生活を送れるように促すことに焦点を当てている。

更に、RA のサポートを受けながら、留学生たちは留学生同士で支えあい始める。「一人暮らしだったら家に帰っても電気もついていないし、食事もない、誰もいない。」とヒョンソクさんは語る。留学生たちは食事の時間に会話を楽しむ。日本人と話すことで日本語が上手くなるし、英語圏の留学生と話せば英語を学ぶこともできる。誰もが不安を抱えて日本にやってきた 4 月、寮のメンバーでの花見に曹さんも参加した。しかし、周りには中国語を話せる留学生がおらず、十分に楽しむことはできなかったという。それから 1 か月が経ち、彼は日本語を共に学ぶことができるヒョンソクと友人になった。曹さんは慶應にきて一番の思い出をこう振り返る。「ヒョンソクのような友人に出会えたこと。」

編集後記

新入生としての新生活は楽しいものであると同時に問題や悩みが伴うもので、言語や食事を始め習慣の異なる国で生活する留学生となると一層その負担は大きいと思います。この記事で日本への留学を考えている諸外国の学生たちの不安要素が少しでも取り除けることを期待します。(敷田彩乃)

取材を通して、“寮”という場所で行われる異文化間の交流を実感できた。特に綱島駅から一緒に帰ってくる留学生達の姿は印象的だった。見知らぬ土地で、交流と安息の場所を与えてくれる寮は、今後慶應義塾大学が多くの留学生を受け入れていくにつれ、役割を増していくだろうと感じた。(加藤祐暉)